「神宮前五丁目地区まちづくり検討会」（第4回）議事要旨

日　時：２０２４（令和６）年１２月２５日（水）１４時３０分～１６時００分
場　所：東京都庁第二本庁舎３１階特別会議室２１（傍聴等：オンライン）
出席者：伊藤座長、朝日委員、遠藤委員、奥野委員（渋谷区）、小西委員（財務局）、
　　谷内委員（都市整備局）

議事要旨
【事務局】
・　本日欠席の越塚委員からは、事前にご意見をいただいているのでご紹介する。
・　図書館の潮流については、現代の図書館は単に図書を収蔵・閲覧するだけの空間ではなく、良質な意匠デザインも取り入れて、居心地の良い空間を演出し、ラウンジやパソコン利用スペースなども併設した、多目的利用を目指したものが増えている。
・　「紙の本」の役割の変化について、「こども」という視点においては、デジタル書籍やニュース、ＳＮＳ等の文字メディアによって、従来の図書館が扱う「紙の本」の役割そのものが変わる可能性がある。
・　図書館の役割の変化については、ＡＩの進化により、読書のスタイルや、文字情報への接し方が大きく変わることが予想され、それに伴い、期待される図書館の役割や具体的なサービスも変化する。
・　デジタル化を進めるためのインフラ整備（例えば、ローカル５Ｇや次世代Ｗｉｆｉ等の最新のデジタル通信設備や、モバイル端末の充電設備、デジタルサイネージ用のパネル、など）が必要である。

【朝日委員】
・　これまでの検討会でも導入機能の議論があったが、今回、都立中央図書館の移転先としての方向性が示され、それに対し当地区は、魅力的な環境になるのではと感じる。
・　人的資本・知識資本との相乗効果を期待するなかで、図書館は知識資本を担う象徴的な機能という意味でも、良い方向性であると感じる。
・　越塚委員のご意見にもあったように、スマホなどにより多様な情報収集が可能な時代に、この場所で生み出せる知とは何か、議論を深めていく必要がある。
・　方針のなかでウェルビーイングの理念の追求については、異論がない。
・　最近の動向として、ウェルビーイングの実行指標の運用が始まった。そのなかで主観的な幸福感の一つの概念として、生活充実度がある。生活充実度は、利便性や目に見えやすいＱＯＬの指標が多かった。一方で、主観的な幸福感に影響する項目としては、文化・芸術、飲食の場など目的なく立ち寄れる場所との結びつきがあるとのこと。特にこども向けの自己実現や生きていく上での基盤になるような機能として、文化・芸術機能などの提案内容は馴染むと感じた。

- 「サードプレイス」という表現について、もともとの理念・概念は「枠をはずしていく」ということが、現代にも受け継がれていると考えるが、時代的背景として、サードプレイスという考え方は、パブリック・プライベートのような二項対立的な考え方がある中でのものであり、今回、コロナ禍を経て、その二項対立の考え方が多元的になっているなかで、この表現にこだわらなくてもよいのではないかと考える。
- 最近使われている近しいニュアンスの言葉としては、共創、シェア、プレイスメイキングなどのキーワードがあり、背景に多元的なイメージが想定されていると考える。その意味でサードプレイスという表現は、理念を生かしつつも新しい言葉に見直しても良いかもしれない。
- 「こども」というテーマに関しては、現代のこどもたちは、経済成長の減速・低迷、少子高齢化の問題などもあるなかで、タイムパフォーマンスなどを重視する傾向があるなど、従来のような形では簡単に参加ということを求められない世代であると考える。そのような時代においては、消費・価値創造など色々な役割を一人の人が担えるような体制が必要と考える。
- 「女性」というキーワードについて、場の歴史として重要な概念であると理解できるが、長期的にはジェンダーの多様化のなかで、女性というカテゴリーだけでなく、多元的に捉えた未来を想定していくことが資料の表現上、読み込める必要があると感じた。

【事務局】
- 「サードプレイス」というキーワードについては、その言葉の定義など鑑みて、今回資料の中で使用しているが、ご指摘も踏まえ、多元的な意味を含む形で、本プロジェクトに合うものにしていきたい。
- 女性支援機能については、ウィメンズプラザ、はたらく女性スクエアという施設が女性活躍の支援を目的に既存の機能としてある。今後、当地区のまちづくりを進めていく中で、社会情勢・ニーズ等も鑑みて長期的な視点で内容を検討していきたい。
- 最後に記載したマネジメントも含めて、様々な専門家も交えて、あり方を整理していきたい。

【遠藤委員】
- 今回の検討会で初めて具体的な機能が提示され、方向性がわかりやすくなって良いと感じた。
- 創造・交流図書館や、劇場などの導入機能について違和感はなく、この方向性で具体的にしていくことに異論はない。
- 創造・交流図書館がどのようなものなのか、より深く具体的に検討していく必要があると感じた。
- 事例としてＯｏｄｉなども挙げられているが、世界の図書館の潮流について調べてみて大き

く３つ程の傾向があると考えた。１つめは、伝統的な図書館のリノベーションにより、重厚感のある空間で知の蓄積を感じるもの、２つめは、モダンな建築で本が大空間に陳列されているようなもの、３つめは、今回提案されたような機能を複合していくなかで交流空間や居心地の良い場所を作っていくタイプに分けられる。

- Ｏｏｄｉやオスロ図書館はウォーターフロントの再開発であるが、大きな目標に向けて拠点整備がされている。図書館にマルチメディアに対応したスペースが作られることは既設施設でも見られるが、最近はパブリックスペースとしても居心地の良い空間として作ることで、本との多様な接し方が試みられている。
- 創造・交流図書館について、この３つの方向性のうち、どのような方向性を目指していくか。都立中央図書館としての機能を想定すると、リアルな本自体は役割が変容していったとしても収蔵機能は必要であり、新しい居場所としての機能を持ちながら、リアルな本の価値をどのように高めていくか考える必要がある。
- 北欧は、様々なものを包摂する価値観が社会に根付いているなかで、Ｏｏｄｉのような空間も受け入れられている。日本の文脈の中でうまく着地していけるような図書館のあり方を研究する必要がある。
- 今回、様々な機能が提案され、図書館、劇場など民間・行政など様々な運営主体が想定されるなかで、それぞれの知恵や技術を生かしながら連携が求められる。
- 構想の段階から、想定している機能の得意なプレイヤーを集めて官民連携の大きな枠組みのなかで、構想を立て、運用の在り方も含めてストーリーを組み立てることが特に重要となるだろう。
- 広大な敷地に多数の機能を収めるために、建物の数が増えると主体も増えるため、体制づくりが鍵になる。それを見据えたうえでまちの将来像を提示していく必要がある。

【伊藤座長】

- 都立中央図書館のあり方を考える有識者会議のなかで、創造・交流図書館という概念が提示されたとのことだが、当地区におけるまちづくりの議論はどのように関係していくのか。創造・交流図書館のまちづくりとしてのあり方について、こちらのまちづくり検討会で議論しても良いのか。
- 多様な機能、敷地が広大という条件のなかで、マネジメントが重要となる。引き続き検討していければと思う。

【事務局】

- 中央図書館のあり方については、教育庁の方でも議論を進めていくが、創造・交流図書館のまちづくりとしての方向性については、こちらでも議論しつつ、最終的には有識者会議での議論と相容れるような内容でまとまっていくことが望ましいが、どちらが検討するということが決まっているわけではない。今後調整していく。

【財務局】

- 別々に検討を行っていくというわけではなく、まちづくり検討会そのものが庁内で連携し開催しているもので、最終的には議論を統合する形となる。

【渋谷区】

- 前回、検討会資料に記載されていた地域の特性の分析は、地域の特徴をよく捉えていた。今回の資料は、それを具体化した内容として受け止めた。
- 閑静な周辺環境に対して、創造・交流図書館は馴染むと感じた。それに対して、青山通り側のにぎわい形成という観点では、渋谷や表参道からの人の流れを考慮すると、青山通りに面してどのような機能を配置するかが重要となる。
- ミュージカルやエンターテインメントの場としての活用・発信という例示があったが、資料上、にぎわい形成についても、図書館と同じような具体性があると良かった。
- 渋谷はエンターテインメント・シティという顔もあるため、閑静な環境と賑わいをどのように調和させていくか、ということが重要になる。にぎわい形成について、検討の材料となるような資料があると理想的であった。

【事務局】

- 今回の資料では、機能の配置までは提示しておらず、検討段階である。景観形成の考え方として、青山通りからのにぎわいの引き込みを想定している。配置計画については民間活力を生かしたまちづくりを検討していくフェーズのなかで、ご意見を踏まえながら調整していきたい。

【朝日委員】

- マネジメント体制について、官民連携の体制が想定される。複合施設の課題として、それぞれの機能が備えるべき要件を議論し、要求水準書を作成するなかで制約が多くなり、結果的に官民連携による創造性、付加価値が発揮できない結果となるジレンマを抱えている。そのなかではマネジメント体制のファシリテート（促進）がとても重要。海外事例も含めて、複合機能の各主体が、より創造的な連携ができるようなファシリテートの仕方についての知見を深めるべき。

【遠藤委員】

- 様々な機能が複合するなかで、あまり体制を強固に決めすぎることも良くない。
- 一元的にマネジメントするだけでなく、いくつかの柱に分けるなど、大きな構図でとらえた方が良い。
- 延岡の事例は、規模が異なるため単純に比較はできないが、当地区の場合は琵琶池などのみどりの空間を使って、地域の方々が活用したり、こどもたちのためのプログラムを提供したりすることを考えると、ワークショップなどで自由奔放な意見を集めた方が、結果的に良い活動を生むのではないか。

- 何かを創造するにあたり、自由度も重要であるため、バランスを取る必要がある。
- 一度に地区全体の整備が完了するわけではないので、核になる考え方を据えたり、open＆flexibleという理念を大切に取り組んでいくべき。

【伊藤委員】
- ４敷地を一体的に活用し、将来像を実現するために、旧こどもの城とコスモス青山は再構築するのか。
- 国連大学については、現在地においてまちづくりに協力していくという考えが示されているという前提で良いか。
- 国連大学は長くこの地に存在しているが、これまでのまちづくりのなかで、国連大学があることのポテンシャルを生かしきれていないと感じる。まちづくりに協力いただけるのであれば、ＳＤＧｓや国際交流の視点で、知の創造拠点として幅と厚みを増していければと考える。

【事務局】
- 旧こどもの城、コスモス青山については、知の創造拠点として再構築していく。
- 国連大学は、現在地で引き続き活動されるとのことで、まちづくりに共創していただけるとの意向が示されており、まちづくりを協力して進めていきたいと考えている。

【伊藤座長】
- 提示されたそれぞれの機能に違和感なく、機能同士の複合により、相乗効果を高めるということも重要な視点であると感じた。
- 緑地・広場機能については、物理的な空間の話になる。敷地の特性（青山通りのにぎわいと後背地の住宅地、琵琶池の存在、敷地の高低差など）をどのように生かしていくか、という議論が機能とは別に今後必要であると考える。
- まず空間を作りながら機能を充実させていくという考え方も重要であり、空間的な検討も今後進めていけると良い。
- 官民連携のプロジェクトについて、国内外の事例参照を通して研究いただきたい。
- 各機能が相乗効果をもたらしながら、新たな知の創造拠点として、ウェルビーイングにつながるような空間としての方向性が提示された。
- 本日の議論では、方向性については全体的に異論がないとのことだったが、具体に詰めていくなかで課題もあるだろう。それについては、事例参照など今後の研究・検討が求められる。

【都市整備局】
- マネジメントの体制については、従来のプロジェクトとは異なる形で新たに提案していければと考えている。
- 官民連携による複合開発として、整備だけでなく、その後の運用段階においても、発展し

ていけるよう、各機能・各主体の良さ・可能性を引き出していけるような、フェーズに合わせた体制づくりなど、先ほどご意見いただいたとおり、国内外の様々な事例も参考にしながら検討していきたい。

- 図書館のあり方としては、有識者会議での議論も参考に、庁内横断的に連携して進めていきたい。
- 斜面地であることなど敷地の特性に関する情報についても改めて整理したい。
- こども向けの機能については、庁内のこども施策の部署も含めて検討していく予定であり、今後の助言いただきたい。

【事務局】

- 次回の検討会では、本日の検討会でのご意見を参考に、事務局でもさらに検討を進め、まちづくりの方向性をさらに深めたものを提示できればと考えている。
- 本日急遽ご欠席された委員には、事務局の方で、後日ご意見を伺い、取りまとめたのち、委員の皆様にご説明する。
- 取りまとめたものは、今回の議事要旨と合わせて、都市整備局のホームページで公開する。（別紙、＜ヒアリングによる小林委員からの意見要旨＞参照）

以上